

葉も生まれる状況になってきたのです。そこで、介護を社会で支える仕組みが求められ、2000年から「介護保険制度」がスタートしたのです。

この頃より、介護の仕事の幅が広がり、介護の仕事を目指す男性も出てきました。また、家庭内でも、介護は女性の仕事という固定観念は崩れ、同居している子どもが介護をするという流れが出てきました。こういった社会の状況から、一昔前のように、介護は女性の仕事、それも嫁の仕事ということはなくなってきたように思います。

先日の新潟中越地震の時、親子で犠牲になられた方は、毎週金曜日に介護のために息子さんが他県から通ってきていて被害に遭われたということでした。定年になって息子さんが母親の介護のために田舎にUターンする話もよく聞くようになりました。

介護利用者の主たる介護者が実のお子さん(男女に関係なく)である傾向が一層強くなってきています。これには結婚年齢の上昇、結婚しない子どもも世代の増加も影響しているように思います。

介護の現場から

介護の現場は社会のひずみが一番早く現われると思っています。介護という

と、高齢者を想像します。私も介護の世界に入るまではそう思っていました。ところが実際は多様なのです。介護を受ける方が50代から100才までの年齢幅があり、それを介護する家族も20代から80代と幅広く、しかも男女さまざまなのです。

ご家族からの相談を受ける時、こんな経験をしました。お手紙をもらい読むうちに、手紙の主は20代の後半の女性、60代始めのお姑さんの相談でした。読むうちに若年性アルツハイマー病と診断されていることがわかりました。結婚したばかりのその女性は、お姑さんの介護のことを真剣に考えている様子が、文面に表れていました。

また、40代のサラリーマンの方から父親の相談を受けたこともあります。てきぱきと打ち合わせをしてくださり、サービスもためらいなく使われました。奥様もおいででしたが、前面にでるのは、息子さんでした。

また、高齢夫婦世帯が増える中、89歳の男性で、85歳の妻の介護をされていた例もありました。お世話をするのが女性であることも今はなくなっています。

最近はお孫さんが介護されていることが多くなっています。この関係かどうかわかりませんが、女の子を望む若夫婦が多いと聞きます。男女の価値観も大きく変化してきているのです。

女性問題の視点から思

い起こすと、ある方が思い出されます。別に暮らす痴呆症と診断された母親の介護問題で、事務所に飛び込んでこられたご夫婦のことです。どちらかが仕事をやめるしかないというようなことを話されました。ところが息子さんには、「うちは男女平等です。結婚する時からそう思っていました。ですから自分の親の介護で妻に仕事をやめてほしくないのです。自分で3か月の介護休暇をとったので、何とか手助けしてほしい」という話でした。息子さんか前面にでて介護や、サービスの調整をされていると、専門家たちから「奥様はおいでではないのですか」と聞かれるといわれています。医療、保健、福祉の専門家が固定観念をもっていたように思います。

ある時、男性ヘルパーの現場を取材したいと言うベテランの女性新聞記

性・年齢階級別にみた同居している主な介護者の状況

